



# 視野が狭くなってきた?と思ったら要注意 まぶたが下がる「眼瞼下垂」について

ある有名歌手が手術をしたことでも注目を集めた眼瞼下垂。「下垂」という言葉があらわす通り、まぶたが下がり視野が狭くなる疾患です。直接的な痛みなどはありませんが、放置すると頭痛や肩こり、睡眠障害などを引き起こすともいわれています。今回はその原因や治療方法について、林礼人医師にお話を伺いました。

## ▼加齢のほかハードコンタクト装着など 日常的な刺激も原因に

人は目を開けるとき、まぶたを持ち上げる筋肉（眼瞼挙筋）を使っています。まぶたの裏にはまぶたを支える瞼板という板状の軟骨と、まぶたを持ち上げる眼瞼挙筋、そしてそれらをつなぐ腱膜があり、その全てが正しく働くことでまぶたを開けることができます（図1A）。しかし、何らかの原因で腱膜が緩んでしまったりつながっていた部分がはずれてしまったりすると筋肉へ力がうまく伝わらず、目が開けにくくなります。結果、まぶたが下がり瞳孔（黒目）部分まで覆ってしまう、これが眼瞼下垂の状態です（図1B）。

「なんとなくまぶたが重い」などですが、

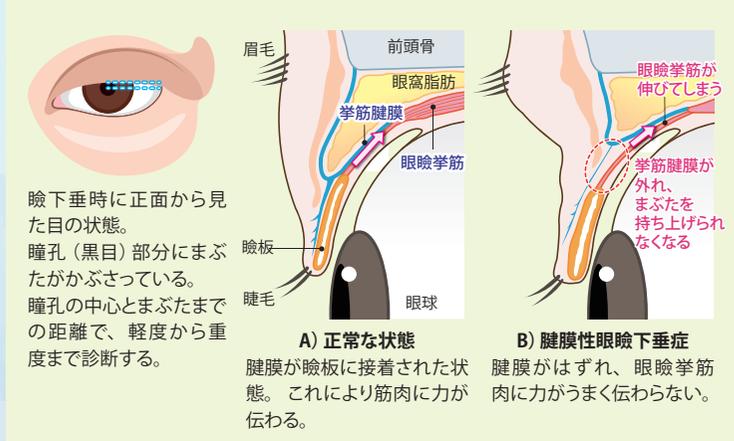
## ▼頭痛や肩こり、睡眠障害の症状を引き起こすことも

※ソフトコンタクトレンズでは通常あまり生じないとされています。

加齢の場合は個人差がありますが、70歳前後の方から増えていく印象です。年齢とともに少しずつ腱膜が緩んでいくほか、まぶたの皮膚そのものが少しずつたんで目に被さり、見えづらくなるという人もいます。

※ハードコンタクトレンズのような硬いもので、日常的にまぶたの裏をついたり、アイメイクを強くこすって落とすといった行為を繰り返すうちに、眼瞼下垂になったり患者さんも多くみられます。また、白内障の手術をする際に機械で目を大きく見開くのですが、その強い刺激が原因となるケースもあります。

図1 まぶたの仕組みと眼瞼下垂



順天堂大学医学部附属浦安病院  
形成外科・再建外科

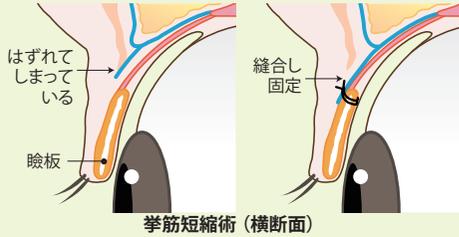
はやし りつと  
林 礼人 医師

## 図2 挙筋短縮術

83歳 女性 両側眼瞼下垂



眼瞼挙筋の力が残っている場合には、はずれてしまった腱膜を瞼板の前面の元の位置に固定する手術をおこないます。



挙筋短縮術 (横断面)

頭痛や肩こり、睡眠障害などを訴える患者さんもいます。一見、無関係に思えますが人はまぶたが思うように上がらなくなる、おでこの筋肉を使って一生懸命目を見開こうとするのです。たとえば、仕事や授業中などに眠気に襲われてしまったときを思い浮かべるとイメージしやすいのではないのでしょうか。眼瞼下垂の状態では、無意識のうちに眉毛を持ち上げた緊張状態が常続します。その結果、額や頭部、首筋、肩の筋肉が張り、痛みとなって現れるのです。睡眠障害もそういつ

た疲れやストレスに起因して引き起こされると考えられます。実際に手術後、頭痛などの諸症状が軽減されたといわれる患者さんも多くいらっしゃいます。

### ▼手術による処置が基本 腫れがおさまるまで2週間程度

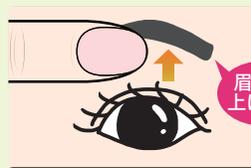
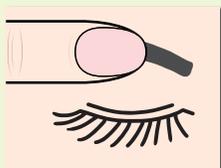
治療は手術が基本です(保険適用)。まぶたの皮膚がたるんだだけの症状の場合には、たるみ部分を切除して縫合します。両眼で1時間程の手術になり、腫れも通常それほど強くないため、基本的には日帰りが可能です。一方、挙筋短縮術(図2)では、緩んだりはずれたりした状態の腱膜を正しい位置に戻し、瞼板と縫いあわせ固定します。腫れも出やすいため、入院が必要な場合もあります。個人差はありますが、内出血や腫れがひくまで2〜3週間、すっきりと落ち着くのに3〜6か月ほどを要します。

眼瞼下垂手術は、目を開けやすく大きくすれば良いというものではありません。縫合箇所が1ミリメートル違うだけでも両目のバランスはもろろん、目の形や印象に大きく影響を及ぼすため、ご本人らしさが損なわれることのないように細心の注意をはらう必要があります。そのため局所麻酔でおこない、術中に患者さんに起き上がった目を開けていただき、目の開き具合や形などを微調整していきます。また、個人差はありますが年月の経過等によって再発もあり、改めて手術が必要となる場合もあります。

## 図3 もしかして?と思ったら セルフチェックしてみよう

### 眉毛の筋肉の動きでチェック

眉毛の上を人差し指で押さえて目を開けたとき、まぶたが開けづかったり、眉毛が上に動いてしまう場合には、眼瞼下垂の可能性あり。



眉毛が上に動く

▼眼科あるいは形成外科  
どちらに行けばいい?

眼科は眼球を専門にする場合が多く、まぶたなど皮膚に関する疾患は形成外科で扱うことが多いです。眼瞼下垂は比較的ゆるやかにまぶたが下がってくる疾患ですが、万一、外的な要因が思い当たらないのに急にまぶたが下がったり、開かないという状態のときには、動眼神経麻痺や脳動脈瘤、脳梗塞といった急を要する疾患の場合もあるので注意しましょう。また、まれにはありますが、重症筋無力症という筋肉の力が弱まる難病のケースもあります。不安があれば自己判断せず、専門(脳神経内科)の医師に診てもらったことが大切です。